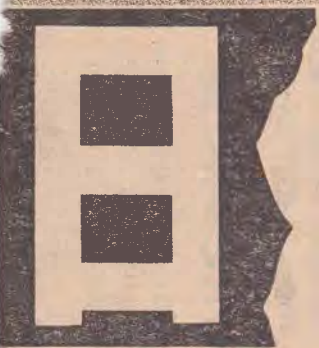


張春橋が



◀右から張春橋元副首相、鄧小平副主席、華國鋒主席

世界衛星中継がウラ目に！ 殉教者を演じ切った二人——地方での内紛や文革派まき返しなど不気味な今後

ときには昂然と裁判官を毒づき、あるいはそれとぼけ、猛然と証人を逆襲し、退廷を命ぜられても強硬に実力抵抗……。

映画スターの座を捨てて二十三歳年上の毛沢東と結婚し、一九六六年に始まった文化大革命では百万の紅衛兵を軍服姿で激励した波乱の女・江青にとって、全世界に中継された「四人組裁判」の法廷は、六十七歳の老優が一世一代の「名演技」を披露するための晴れ舞台だったのかもしれない。

殉教者を演じ切った江青と、裁判中始終黙って通した張春橋元副首相に世界中の驚嘆の目が集まったのは当然だろう。

しかも、この復讐劇はまだ幕を開けたばかり、第二幕は江青・張支持の旧文革派が中国各地で動き出すシーンから始まるようだ。

衛星中継なんて「恥」です

「私が感心したのは江青の若々しさと、特に裁判官に向かって『ファシスト』と叫んだことです。なるほどな、と納得させる名セリフでした。テレビ中継だったということで、江青の株は逆にながったと思いますね（上智大教授・渡部昇一氏）

評論家の山本七平氏によると、「そもそも中国というところ

ろは士大夫階級（戦国時代の士族階級）というものは裁判を受けたくない。それほど名誉を重んじるという伝統があった」という。だから、四人組裁判をテレビで中継したのは、中国国民に対する見せしめ辱めという意図が多分にあったわけである。だが国外、ことに日本や西側諸国に對しては逆効果だったようだ。

徹底大予測!!

『江青に味を付けた』 世界中を大々復活する

外電によると、サンフランシスコの中国人街に住む中国系米人約百五十人が江青死刑判決に抗議し、「毛沢東革命支持」を叫びながら中国領事館に向けてデモをしたというし、フランスの女性解放運動家たちが国連の中国代表部を訪れ、死刑判決に反対する抗議文を手渡した。それには六千人のフランス人の署名があったという。

「中国の中でも、声なき声の多くは、四人組だけをスケープゴートにした政治的裁判とみているはず。いうならば魔女狩りであり、文革にいちばん責任のある毛沢東の責任問題は棚上げにしてしまった。ですから、意外と中国の大衆はシラけているのです」(東京外語大教授・中嶋嶺雄氏)

中国には、「メンドリがときを告げるとその家は亡びる」という儒教の思想が、革命後の今も続いていて、権力の座についた女はほとんど例外なしに悪女にされる。だから文革派のリーダーとして飛ぶ鳥を落とす勢いだった江青が毛沢東の死後、四人組逮捕で一挙に失脚したあと、彼女を非難する『人民日報』の言葉は、「野心家」「陰謀家」に始まって、「人殺し」「妖怪」「蛇」「オオカミ」「スリ」「淫婦」と悪罵の限りを尽くしたものであ

る。彼女が四人組の他の三人の男たちとフロに入っているという、ボルノマがいの漫画まで掲載された。(松井やより『人民の沈黙』より)。

こうして四年間、徹底的に四人組の「悪」がキャンペーンされたあげくの「裁判ショー」だったが、しかし、鄧小平副主席らの体制が期待した林彪・江青を裁いて文革派を一掃する、という効果をもたらすことはできなかったようである。

最近、中国から帰ったばかりのA氏(中国研究家)は、現地の空気を次のように伝える。

「裁判に対する一般の人たちの関心は薄い。どうせあれは政治的な復讐劇であり、権力闘争の一つなのだからわれわれには関係がない、という態度です。なぜかという、民衆は裁く側の中にもかつての四人組の手下がいいることを知っているからです。一般の人々は、あの裁判が衛星中継で世界に流されているなんて知らなかったが、私がそう説明すると、『それはわが国の恥です』『周恩来が生きていればそんなことはさせなかったろう』と不満そうでした」

権力者と民衆とのこうしたチグハグな感情を知ってか、江青はあくまでも、「毛沢東思想の殉教者」の役を演じ切った。

▲上は四人組裁判法廷での江青の四態と法廷内(一)

対照的に張春橋は終止沈黙を守ることで、江青の引き立て役に回り、その結果、鄧小平副主席ら体制側が世界に宣伝しようとした「中国は法治国家である」というプロパガンダさえ、逆効果になってしまった。

「あれは法治以前の裁判ですよ。最もよくないのは、事後立法で裁いていることです。逮

“文革世代”は水平思考型

すべての目論みが裏目に出た上、江青、張春橋に対する判決も、「死刑、執行猶予二年」という妥協的な結果だった、とみる人は多い。

「あっさり処刑できなかったところに鄧小平の弱さがみられる」と解説するのは、京都産業大学の三好修教授。



●死刑判決直後の江青と彼女の夫だった故毛沢東氏(向心)

捕してから法律をつくって裁いている。これは戦犯裁判と同じ暗黒裁判ですよ。(波部昇一氏)ソ連のタス通信は一月二十五日、「四人組への判決は、党や国家機関や軍部などでこれから始まる大がかりな粛清の序曲だ」と報じた。中国指導部内の権力闘争はこれからの本番なのである。

「それは社会層に文革派がまだ厳然といるからです。黨員三千八百万人のうち半分近くの千八百万人が文革の時に入党した文革派、毛沢東派ですからね。そんな中で江青らを殺してしまえば、彼女らを神格化してしまう恐れを鄧派はひしひしと感じたからです」

今の中国の十億の人口のうち「文革世代」といわれる二十代前半から三十代後半までの人々は、黨員、非黨員をふくめて三億から四億。

「その全部が現体制に批判的というわけではないにしても、批判の火の手が上がればいつでも共鳴する素地を持った世代です」と、共同通信の前北京特派員・伊藤正氏はいう。

伊藤氏によると、この文革世代の特徴は――

①文革を体験(あるいは目撃)して、「お上」に逆らうことを知っている。文革時代、彼らは毛沢東や江青らに「駒」としてこき使われ、指導者というものに対する信頼を失っている。逆にその分、自立的な気分を持っている。

②文革世代以前の中国人は、「昔と今を比較」という垂直思考型だったが、七〇年代以降は外国人や文物がどっと入って来たため、水平思考型になり外国と自分らを較べて考えるようになった。そこで文革世代が知ったのは自らの貧しさであり、根強い封建制であり、一部特権的階級の存在である……。

中でも危険視される存在は、文革時に都市から農村に下放された千二百万人といわれる青年たちである。

「一昨年上海で出会った二十五、六歳の女性の例ですが、文革で下放。それから何とか脱出しようとツテを求めて外国語学校で日本語を習い、今ではツーリストの通訳をしている。だがこんな例はほんとにまれな幸運で、ほとんどは何の能力も身につけず、文革の発祥の地、上海にうごめいている」(三好氏)

つあり、「一つはより大幅な自由化を求める右の動き、もう一つは文革否定の四人組裁判はけしからんという左からの批判です」(時事通信社前北京支局長・志村規矩夫氏)

それら、いまだに残る下放青年を中心とする「異議申し立て」の運動の爆発の一つが、最近、新疆ウイグル自治区で起こったという大規模な暴動であり、昨年の北京駅爆破事件も下放青年

中国版“赤い貴族”への不満

中国の社会不安の元凶はインフレである。

「一五〇といわれているが、物によっては二〇〇以上も上がっている。それも昨年九月からです」(A氏)

「中国の経済はおそらく今が一番危険な状態でしょう」と説明するのは、アジア経済研究所の嶋倉民生氏。

「経済の疲弊は財政の赤字、物価の上昇、プラント契約の破棄などに顕著です。一五〇という物価上昇は毛沢東時代にはありえなかったことで、中国民衆は長らく経験しなかった超インフレに襲われている。財政赤字も、財政規模一千百億円の中で八十億円といわれている」

の犯行だった。

北京で出回っているという地下出版物には、「江青、張春橋は死を恐れない革命の犠牲的精神の持ち主だ。鄧小平らは反動だ」と書かれてあるという。

また四人組擁護派の胎動と各地で多発する労働者のストライキに対して、鄧小平副主席みずから「ストを起す時は上級党組織に通知すべきだ」と警告しなければならなかった。

ど滞在した東京外語大・岡田英弘教授の体験はこうだった。

「滞在中、運転手つきの公用車をつけてもらったが、運転手はガソリン節約のために、いったんスピードが出るとエンジンに切ってニュートラルで車を走らせる。カーブや坂道でも減速せずに走るのだから恐ろしい限りだった。ホテルでも、電圧が一定しないため、度々電灯がスーッと暗くなる。こんな状態では工場や製品を作ってもまともなものができるとは思えない。デパートでも物資が極端に不足しているのだという……」

食糧不足も深刻だ。七八年、七九年と二年続いて小麦は減産し、一人当たりの生産性も低下した。工業開発で農地が減り、逆

手軽な酒蔵トリオ。

小さい酒蔵 1180ml 詰 1600円

ほとほとの酒蔵 900ml 詰 1700円

大きい酒蔵 1800ml 詰 1700円

澤之鶴バック

酒蔵

清酒一級

神戸・灘 沢の鶴株式会社

に消費人口は増大している。今後四年間に六百万トから九百万トの小麦をアメリカから買入られる約束は取りつけたが、そのための外貨は、華国鋒主席の報告でも「百十億の赤字」。

「これまで一番の外貨のかせぎ手だった日本に対する原油の輸出も、千五百万トの予定が六百萬トに減った。大慶油田が枯渇してきたようだ。となると中国は現金収入が減る一方だ」(岡田教授)

国内に「一千万人の失業者がいる」という情報に加え、さらに暗い話も伝わってくる。

「昨年の夏頃から多数の知識人が自殺したといわれています。原因は今の政治に対する絶望感からだといわれています」。

失業者を中国では職業待機組というんだが、職にあつくためにコネがなければなかなか順番が回ってこない。ソ連の赤

華国鋒は野に放たれた虎だ

「四人組裁判のあと、その動向が一番不透明なのが軍隊です」と、中嶋嶺雄教授はいう。

四百五十万人の軍部の実権は、文革の生き残り組が握っている。

「もともと文革は軍がリードして進めたものだし、鄧小平が三年かけて八百万人もの党員を整風する」という限りにおいては、軍内部の党員の半分が肅清の対象になる。軍が黙っているわけではないですよ」(伊藤正氏)

今度の裁判では、黄永勝元総参謀長ら五人の元将軍が被告と

い貴族のような特権階級だけが幹部専用の店で西洋のぜいたく品を買えるようになっていし、鄧小平の息子をはじめ、幹部の子弟がどんどんアメリカへ

勉強に出て行っている。向見看(前を見て進もう)というスローガンを、向銭看(カネに向かって進め)と言い替えて現政権を批判しています」(A氏)

うとしない。

一方、各地で起こっている爆弾騒ぎには、「軍が関与しているのは確実」(中国問題研究家・高木桂蔵氏)という声もあり、なにやら物情騒然といった雰囲気なのである。

そして、四人組裁判の途中で「失脚」を余儀なくされた華国鋒主席の動向も無気味なのである。

「そうして彼(華主席)は野に放たれた虎になったのです。華主席は文革に協力した責任はあっても、私欲のない身ぎれいな人物として一般民衆の支持がある。彼が不満分子の青年たち、地方の若手官僚、知識分子などと結びつき、解放軍の中の不満分子を動かすと、場合によっては北京を包圍できる力になる可能性がある」と中国問題研究家のA氏はいう。

鳴り物入りの四人組大裁判劇だったが、今後の風の吹き方いかんによっては、カイドのプラズとマイナスが逆転するよう、今度は江青一派が復活して、鄧小平氏らを裁くといった事態もあながち荒唐無稽な空想ではないのかもしれない。今でも中国は「三国志」の時代の延長——そんな気がする。

取材/金森和行